

## 第IV章 考 察

### 第1節 下北方の埴輪

#### a. 下北方1号墳の埴輪

下北方1号墳では、従前より埴輪の表採資料は知られてきたが、いずれも細片であり、その様相は不明であった。しかし今回の発掘調整により、1号墳の周溝や、地下式横穴墓内の崩落土中より一定の資料が得られ、川西編年IV期前半に比定されることが判明するとともに、その全形を復原することが可能となった。

突帯1条と突帯設定技法による沈線が残る資料から、突帯間間隔は13.5cm前後、反転復原により胴部径は35cm前後である。透かし孔の部分が残る資料は2個体あり、正円に近く復原すれば、径5cmで、胴部径、突帯間間隔に比して小振りである。段構成は、出土した資料からは復原できないため、周辺資料から類推するしかないが、同一古墳群内において、後出する13号墳の円筒埴輪は、4条5段構成である。一般に円筒埴輪は、時間の推移とともに段数が減少する傾向にあり、これに沿えば、13号墳に先行する1号墳の段構成は5段以上である可能性が高い。但し、1号墳の資料は器厚1.0cm前後と、総じて器壁が薄く、堅緻に焼き上がってはいるものの、6段、7段の構成では自重に耐えうるものか、疑問である。従って13号墳と同じく、4条5段構成と考えるのが、最も妥当であろう。透かし孔の配置についても、出土した資料からは不明である。下北方1号墳と同じく4条5段構成の県内の資料のうち、透かし孔の配置が判明するものは同じ下北方古墳群中の下北方13号墳（川西編年V期）、西都市西都原古墳群の女狭穂塚古墳（Ⅲ期）、同三納古墳群の松本塚古墳（Ⅳ期後半）、新富町祇園原古墳群の新田原62号墳（Ⅴ期）があり、女狭穂塚古墳を除いて、いずれも透かし孔は一段につき2方向、2段目と4段目において、隔段直交方向に配置される。下北方1号墳と同一時期のものはないが、前後する時期のものがいずれも隔段配置であることから、下北方1号墳の透かし孔も、隔段直交配置である可能性が高い。

以上より復原した下北方1号墳の円筒埴輪が第23図左である。器高約70cm、突帯4条5段構成で、底部から口縁部までほぼ垂直に近く立ち上がる。胴部径が35cm前後と非常に大きく、ために、全体のプロポーションとしては横に大きな、重量感のある印象となる。しかし器壁は1.0cm前後と薄手で、断面台形状の突帯は突出度が高い。隔段直交方向に配置された円形の透かし孔は径5cmと小振りで、細部の作りはシャープと言える。外面調整は1次調整タテハケのみ、内面調整は上部ハケ、下部はナデによる。焼成は堅緻で、器面に黒斑はない。

#### b. 下北方古墳群の埴輪

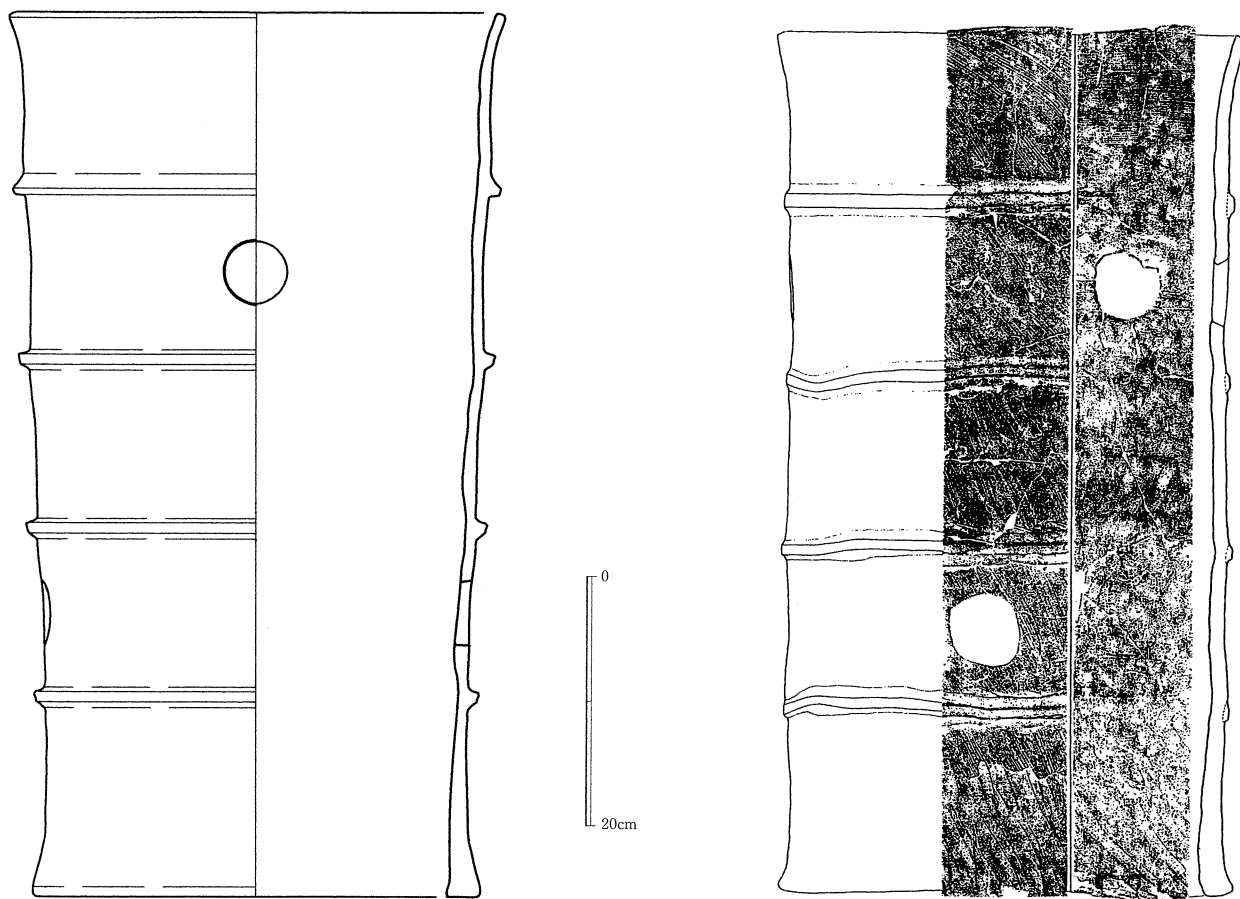
下北方古墳群では、前方後円墳の1号墳、3号墳、13号墳で発掘調査により円筒埴輪が出土している。13号墳は墳丘上、1号墳、3号墳は周溝内からの出土である。他にこれら前方後円墳に隣接する円墳の5号墳（3号墳北隣接）、12号墳（1号墳西隣接）、14号墳（13号墳西隣接）の

周溝からも埴輪が出土しているが、いずれも細片の少量出土に留まり、またそれぞれに隣接する前方後円墳の埴輪と類似することから、流れ込みの可能性が高い。

13号墳の円筒埴輪は、径の違いより大型、中型、小型の3種に大別され、うち、全形のわかる大型のものは、器高約69cmで底部から口縁部までほぼ垂直に立ち上がる。突帯4条5段構成で、胴部径約35cm、胴部突帯間間隔14~15cmと大型であるが、器壁は1.1cm前後と薄手である。透かし孔は径5~6cmと小振りで、隔段直交に配置される。突帯は突出度の低い断面台形状で、外面調整は1次調整タテハケのみである。また特徴的な要素として、自重によるゆがみを補正するためか、底部近くにタタキが施されている。川西編年V期前半に比定される。

3号墳の埴輪は細片しかなく、全形は復原できないが、1号墳、13号墳の埴輪と比較すると、調整の施し方や全体的な作りなどが1号墳よりやや粗雑化しているが、13号墳よりは丁寧に作られている印象を受ける。従って、1号墳と13号墳の間、川西編年IV期の後半に位置づけるのが妥当かと思われる。

川西編年IV期前半の1号墳と、V期前半の13号墳では時間的な隔たりがあり、後出の13号墳では外面調整の顕著な粗雑化や突帯の低平化、突帯設定技法の消失や底部近くのタタキ調整など、時間的推移を表出した変化や、新出の要素などが顕れている。しかしながら、底部から口縁部にかけてほぼ垂直に近く立ち上がるプロポーシオンや、大型の胴部径、小振りの透かし孔など、基本的な造形が共通している。細かくは胴部径や突帯間間隔、透かし孔の径などの計測値も近似し、類似度は極めて高い。



第23図 下北方1号墳（左：想定復原）・13号墳（Scale：1/6）

下北方13号墳と同時期、下北方古墳群の位置する宮崎平野の北部、一ツ瀬川流域では祇園原古墳群が最盛期を迎え、百足塚古墳をはじめ、水神塚古墳、機織塚古墳など埴輪採用墳が多数存在するが、形態的に13号墳の埴輪と類似するものはない。

3号墳の詳細が不明な現段階において断言することは難しいが、下北方古墳群では、累代的な、系譜を一にする埴輪生産が行われていた可能性が考えられる。ただし、その中でも13号墳では底部近くにおけるタタキという新出の技法が取り入れられており、古墳群内で保持された埴輪生産も、決して排他的なものではなかったことがわかる。

## 第2節 下北方の古代瓦

本遺跡では凸面斜格子目叩きの古代瓦片が出土している（第22図125）。わずか1点のみであり、遺構外出土ではあるものの、宮崎市域で確認されている古代瓦は多くはなく、極めて重要な資料である。

現在、宮崎市域では、一ツ瀬川右岸域、海岸部の第2砂丘上、当遺跡の所在する下北方台地上の大きく3箇所において古代瓦が確認されている。

一ツ瀬川右岸の下村窯跡群（佐土原町字東上那珂）は、8世紀後半から9世紀代を中心として操業された瓦陶兼窯である（木村編 1996、竹中編 2008）。凸面縄目叩きによる平瓦が多くを占め、斜格子叩きのものはない。同じ一ツ瀬川右岸域では、隣接する西都市に国衙（寺崎遺跡）や国分寺があり、下村窯は直線距離10km程の位置にあるこれら官衙への供給源のひとつと推定されている。

一ツ瀬川右岸から大淀川左岸まで、宮崎市の海岸部を南北に縦貫する第2砂丘の南端では、「億字石神（現山崎町字下ノ原周辺か）」で古代瓦が出土すると記載されたものがあり（石川 1968）、同じく第2砂丘南端の猿野遺跡で、凹凸両面に縄目叩きを施した平瓦片が1点出土している（鳥枝・久富編 1996）。

下北方台地上においては、本遺跡と下北方5号墳周辺遺跡（金丸編 2008）の発掘調査で古代瓦が出土しており、他に字塚原に所在する景清廟という廟堂周辺畑地での表採資料（長津編 1991）、及び同じく景清廟周辺において、1984年に水道工事の際に出土した資料（第24図）がある。現在までに確認されているのは、平瓦28点、丸瓦1点で、軒瓦はない。全体に土師質のものが多く、須恵質にまで焼き上がっているものはない。一部、側面の角度より一枚作りの可能性が考えられるものもあるが、大方は円筒桶による桶巻き作りと思われる。側面の面取り加工や、凹面側縁近くの段など、側縁付近を二次的に調整するものが多い。凸面文様は一辺7mm前後の格子目叩き、13mm前後の斜格子叩き、及びナデ消しの3種で、縄目のものではなく、量的には格子目叩きのものが最も多い。

格子目叩きのうち、第24図1の凹面には粘土板の継ぎ目や、細沈線として残る分割突帯の痕が観察でき、また凹面の器面は模骨の痕が見られない平滑な弧を描くことから、円筒桶製である。また凹面の側縁近くに段を持つ3は、側面に2段の面が形成されているが、凸面側の面は製作台上における側面切り落としの際に、凹面側の面は側縁段整形時にそれぞれ形成された面と思われる。